

Title	原始基督教と社会問題 (下)
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.6 (1923. 6) ,p.885(63)- 897(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19230601-0063
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230601-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

交易經濟社會に於て生産者と消費者と分離し、其間に第三者あり、兩者を聯絡せんとするには必らずや以上の行爲及び資本を必要とするものであるが、而も分業の行はるゝ今日の商業が以上凡ての職分を自ら行ふものではない。けれどもA需給仲介行爲に關する行爲特に一、二、三は凡ての獨立商業の行ふ所で、蓋し配給行爲の本質的職分をなすものである。従つて此種職分の分離は經濟組織の上に重大なる影響を及ぼすものであつて、亦余が配給組織は勞働の組織と云ふ所以である。

原始基督教と社會問題(下)

高橋 誠 一 郎

四

神の國(Reich)は人間の全社會的生活を包含する集合的概念である。神の國は個人の心胸内に興起する。イエスの教旨は著しく個人主義的であつた。それは個人に訴ふるものであり、個人が正しく行動するの時、此の世は變革せらる可しと倣すの推定より出發するものである。而も事は人間の原子を救助するに存せずして、社會的有機體を濟度するに在る。問題は個人をして天國に入らしむるに非ずして、地上の生活を改造して天國と一致せしむるにある。個人をして協同的生活に向はしむるものは精神若しくは心意の態度である。彼れが公正なる社會を建設するが爲めに精神的の力に依頼せるは、偏へに彼れが社會建設者としての聰明を明かにするものである。彼れが最小なる社會的核心に就いて其の事業を開

始したのは彼れの忍耐と巧妙とを示すものである。然しながらイエスは曾つて後世の神學に於て觀るが如き極端なる左道に陥るとがなかつた。神の國は天上と等しく地上にも現れなければならぬ。彼れは曾つて人間社會より離れて個人を觀察することがなかつた。彼れは曾つて人間の群居性を忘却することがなかつた。總べての人間の善性は社會的善性でなければならぬ。根本的に群居的な人間の徳性は其の社會の善良なる一員たるに存する。人は社會的なもの時に道德的であり、非社會的なもの時に不道德である。善良の最高なる典型は快く自己の存在と自己の能力の全部を擧げて社會に奉仕せしむる所のものである。邪惡の最高なる典型は自己を満足せしむるが爲めに社會の財富と幸福と善徳とを消滅せしむる所のものである。イエスの倫理學に於ける根本的の徳は愛である。神は新たな社會の精神的指揮者であり、愛の權化である。蓋し愛は社會を構成する形質なるが故である。人間の生活は愛に始まる。斯くてイエスが人々をして神の國の更らに高貴なる社會的秩序に向つて備へしめたるの時、彼れは愛の能力と習性とを鼓舞し、共同の福利に貢獻せんとする眠れる力を覺醒せんとした。

愛はイエスに取つては飄搖不定の情緒に非ずして、社會的協同一致を生ぜしめんとを意圖する最高にして最確固たる精力である。(Kauschenbusch, op. cit., p. 65, 67, 68.)

イエスはヘブルの豫言者の精神を以て富裕なる律法學者とパリサイ人とに對抗し、彼れ等を以て「天國を人の前に閉ぢて、己れも入らず、且つ入らんとする者の入るをも許さざる」と宣言した。(馬太傳第二十三章第十三節)。彼れ等は遍く海陸を歴巡りて一人の信者をも作らんとし、既に自己の宗旨に引入るれば、之れを己れに倍したる地獄の子と爲す。(同第十五節)。彼れ等は蝸蠓を濾し出して駱駝を飲む盲目なる手引である。(同第二十四節)。彼れ等は杯と盤の外部を淨めて、内部には貪婪と淫欲とを充すものである。イエスは言ふ「先づ杯と盤の内を淨くせよ、然らば其の外も亦た清かる可し」と。(同第二十五―二十六節)。

彼れの弟子は大部分卑賤なる人民であつた。マルコが夥しき群集、欣びて之れを聞けり」と記せるものは這般の消息を傳ふるものである。(馬太傳第十二章第三十七節)。「パリサイ人答へけるは、汝等も亦た惑はされしか、有司又はパリサイ人の中に一人だも彼れを信じたる者ありや。されど律法を知らざる、かの群衆は祖

はれたるものなり」と。(約翰傳第七章第四十七、八節)。司祭長、律法學者及び人民の重立ちたる人々はイエスを殺さんことを企んで居つたのであるが、人民は皆な憧れて其の教を聽けるが故に、之れを如何ともするものが出来なかつた。(路加傳第九章第四十七、八節、同第二十章第十九節、馬可傳第十一章第十八節)。

イエスは何物にも増して商業化せられたる非社會的宗教を憎んだ。「禍なる哉、誓なる手引よ。汝等は云ふ『人若し宮を指して誓ふは事にも非ず、宮の黄金を指して誓はゞ果さざる可らず』と。愚かにして誓ひなる者ども哉、黄金と黄金とを聖ならしむる宮とは孰れか尊き。汝等は又た云ふ『人若し祭壇を指して誓ふは事にも非ず、其の上なる供物を指して誓はゞ果さざる可らず』と。愚かにして誓ひなる者は、供物と供物を聖からしむる祭壇とは孰れか尊き。其の祭壇を指して誓ふ者は、祭壇及び其の上の總べての物を指して誓ふなり。又た宮を指して誓ふ者は、宮及び其の中に住み給ふ者を指して誓ふなり。又た天を指して誓ふ者は、神の玉座と其の上に坐し給ふ者とを指して誓ふなり」。(馬太傳第二十三章第十六——二十二節)。彼れ等は白く塗りたる墓に例ふ可きものである。外面は美しく見ゆるが、内

部は死人の骨と諸々の汚穢とを以て充たされてゐる。(同第二十七節)。彼れは神の宮の内に牛、羊、鴿を賣る者と兩替屋の坐せるを見て、繩を以て鞭を作り、彼れ等と牛羊の類とを逐ひ出し、兩替屋の金を撒き散し、其の案を覆した。(約翰傳第二章第十四、五節)。神の禮拜は商業化せらる可きではない。イエスは其の父の家、商買の家と爲ることを欲しなかつた。(同第十六節)。彼れは祈の家が強盜の巢窟と化するを怖れた。(馬太傳第二十一章第十二、三節、馬可傳第十一章第十五——十七節、路加傳第十九章第四十五、六節)。而して彼れが宗教の名に於て搾取せられつゝある民衆の要求を擁護しつゝありし間に、彼れに對する專制的、偽善的、非社會的宗教の指導者が彼れに對する陰謀は終に其の機熟して彼れは十字架に着いたのである。

五

精神的價值に對するイエスの熱誠は彼れをして物質的財富を疑懼せしめた。彼れは幾度びか強烈なる言辭を以て黄金の誘惑と物財の惡影響とを警告した。イエスは私有財産を以て同胞愛の原理の實現を妨ぐるものであると信じた。彼れは神とマンモンの關心事の間に嚴烈なる區別を行つた。彼れは是れ等二種の

關心事を以て全然相反するものと信じた。人は財産に依頼する程度に於て、自己を神及び精神的事物より分離せしむるものである。(馬太傳第六章第二十四節、路加傳第十六章第十三節)。彼れに來れる者は、實に富の取得を蔑視す可きことを教へられたるのみならず、彼れにして若し現世的富を所有せんか、彼れは是れ等のものを賣りて、其の賣上高を貧者に施す可きことを命ぜられた。(馬太傳第十九章第二十一節、馬可傳第十章第二十一節、路加傳第十八章第二十二節)。永遠の生命を得て精神的生活に活きんとする者は、娑婆世界に於ける貨幣上の利得欲を厭離しなければならぬ。

貧者に對するイエスの同情は豊かであつた。「幸福なる哉、汝等貧しき人」(ἐν πτωχείᾳ ἡ εὐτυχία)。幸福なる哉、汝等今泣く人、其は笑ふことを得可ければなり。幸福なる哉、汝等人の子の爲めに憎まれ、遠ざけられ、罵られ、其の名は惡しとして排斥せらるゝ時、其の日には歡び躍れ、其は汝等の報天に於て大いなればなり。即ち彼れ等の先祖は豫言者等に斯く爲したりき。然れども汝等富める人は

禍なる哉、其は今己が慰安を有すればなり。汝等飽き足れる人は禍なる哉、其は飢ゆ可ければなり。汝等今笑ふ人は禍なる哉、其は歎き且つ泣く可ければなり。汝等人々に祝せらるゝ時は禍なる哉、即ち彼れ等の先祖は偽豫言者等に斯く爲したりき。(路加傳第六章第二十一—二十六節)。イエスは又た「富める者の神の國に入るは如何に難きぞや」と歎じてゐる。(路加傳第十八章第二十四節、馬太傳第十九章第二十三節、馬可傳第十章第二十三節)。而して路加の福音書は又たラザルと富豪の物語を載せてゐる。(同第十章第十九—三十一節。拙著「經濟學史研究」大正九年版六一—二頁参照)。收税吏の長にして富豪なるザアカイ(Zakaeus)はイエスの弟子と稱せられた。而も彼れはイエスの弟子と爲るに先立つて、實に桑樹を下りて、神に對する從順を宣明しなければならなかつたのみでなく、社會的にも亦た改宗を行ふの必要があつた。彼れは其の富の一半を貧者に施し、若し人を損傷して得たる物あらば、償ふに四倍を以てせんことを約した。(路加傳第十九章第一—十節)。

然しながら福音が主として貧者に對して説かれなければならなかつたことは、

貧者其の者が富者に比して福音を要すること大なるが爲めでもなければ、又た貧者が特に恵まる可きものであるが故でもなく、彼れ等が其の必要を認識せるに由るものである。富者の態度が彼れ等の富に依つて冷淡無感覺であるに反して、貧者の態度は彼れ等の貧に依つて常に何物かを容受し抱擁せんとして居つた。富貴が人に尊大我慢の念を興ふるに反し、貧困は彼れに謙抑卑下の感情を興へる。イエスに若し社會主義があつたとしたならば、其れは精神的社會主義と名づく可きものであらう。(前掲拙著四八——四九頁參照) イエスは正さに愛の共產主義を表明した。而も彼れは嘗つて財産の共產主義を説くことがなかつた。(Viktor Cathrein, *Der Sozialismus, ein Untersuchung seiner Grundlagen und seiner Durchführbarkeit*, 1920, S. 19.)

曾つて群集の一人がイエスに向つて「師よ、我が兄弟に命じて家督を我れに分たしめ給へ」と云へる時、彼れは之れに答へて曰ふ「人よ、汝等の上の判事又たは分配者として、誰か我れを定めしぞ」と。斯くて彼れは衆人に告げて曰ふ「戒心して貪心を慎めよ。夫れ人の生命は所有物の豊かなるに因らざるなり」と。(路加傳第十二章第十三——十五節) 彼れは又た更らに大なる穀倉を建つるが爲めに其の穀倉を破

毀し、己が魂に向つて多年の用意に蓄へたる財産許多あるが故に、心を安んじ、飲食して、樂しめと云ひ、己れの爲めに財を積み、神の御前に富まざる人の悲哀を説いた。(同第十六——二十一節)。而して又た彼れは此の世の思ひ煩ひを避く可きことを教へた。何をか食ひ何をか飲まんと求むること勿れ、汝等の父は汝等の之れを要することを知る。然れば先づ神の國と其の聖徳とを求めよ、然らば一切の物は汝等に加へらる可きである。(同第二十二——三十一節、馬太傳第六章第二十五——三十三節)。

イエスは貧困を攻撃して之れを防止せんとするものではなかつた。貧困は恐らく永劫盡くるの期なかる可きものである。(馬太傳第二十六章第十一節、馬可傳第十四章第七節、約翰傳第十二章第八節)。イエスの注意は恒に富の所有に伴へる精神的危険の上に聚つたのであるが、而も彼れは決して貧困を根絶せしめんとすることがなかつたのである。イエスは個人を改造し新生せしむるに依つて理想的社會を建設せんことを提唱するものである。彼れは人間性其の者を改造せんとする急進的綱領を掲げて立つものであつた。彼れは總べての利己的衝動及び

本能が他愛的社會化的欲望に對して完全に從屬せしめらる可きことを命じた。イエスは其の終生の事業を通じて物質的要素が精神的價值に從屬せしめられざる可らずと做すの原則を高調した。彼れは這般の原則を明瞭ならしむるが爲めに、屢々物質財を以て殆んど取るに足らざるものとして取扱ふに特別の苦心を行つたのである。彼れは人の子と人の世とがマンモンの崇拜に由つて自由を失へるを觀た。彼れは經濟的影響より生ず可き隸屬から此の娑婆世界を釋放す可き靈化の計畫に着手したのである。此處に彼れの革命的事業は存する。

イエスは彼れが地上に火を放つが爲めに來れることを知つてゐた。彼れは平和を愛することが大であつたが、而も其の事業の實際的影響は平和に非ずして反なることを知つてゐた。「馬太傳」第十章第二十四節に置かれたる辭句は斷じて M. Beer の主張するが如く、其の所を失するものではない。(Social Struggles in Antiquity, Eng. trans. by H. J. Stenning, 1922, p. 188.)。而も彼れの「革命」は暴力と流血とを伴ふものではなかつた。宗教は彼れの生命の中心であつた。彼れが社會的關係に關して云へる一切のものは宗教的見地より云へるものである。彼れは人間生活の一

部局の救濟者たるには餘りに偉大であつた。洵にイエスは近代の意義に於ける社會改革家ではなかつた。彼れは人間生活に於ける害惡と其の苦難とを觀た。而も這般の事實に對する彼れの見地は全然精神的の其れであつて、經濟的若しくは歴史的のものではなかつた。彼れは人々が正しき共同生活を行ふ可きことを欲した、而して彼れは單に社會問題が精神的問題たる限りに於て之れを取扱つた經濟的欲望の問題が個人に對して解決せられ、凡ゆる其の外部的調整が能ふ限り快適なるの時、彼れは猶ほ其の生活の恐る可き空虚に由つて惱まれ、其の存在は無意義なる謎語と幻覺とであることを感ずることがあるであらう。財富分配の問題が全社會に對して解決せられ、萬人悉く平等なる安慰の裡に痛切なる不安なくして生活し得るとしても、果して幾人が其の靈魂の平安を得て久遠の歡喜と満足とを享有するかの問題が残る。普遍的繁榮は普遍的 *ennui* 並びに *Weischnetz* と相容れざるものではない。(Rauschenbusch, op. cit., p. 47.)。

現世の缺陷と不完全とは神的睿智が收穫時に至るまで成長するを許したる毒麥である。「馬太傳」第十三章第二十四節以下毒麥の喩參照。惡魔の蒔ける毒麥は

應がて此の世の終末に於て、天使の手に刈り集められて火に焚かる可きものである。其の間に神の國の原理は人々の胸裡に働いて、其の動機を變化せしめ、延いて其の行爲と性格とに及び、斯くて又た、婦之れを取りて三斗の粉の中に藏せば、終に悉く膨るゝに至る。麴の如く(同第十三章第三十三節)路加傳第十三章第二十一節、麴の喩参照)全社會に普及する。天國は人の取りて其の畑に播きたる芥種に似たり。總べての種の中、最も小きものなれども、長ちて後は總べての野菜より大きくして、空の鳥其の枝に來り棲むほどの樹と成る。(馬太傳第十三章第三十一、三十二節、路加傳第十三章第十八、十九節)天國は又た畑に藏れたる寶、美き眞珠を求むる商人、若しくは海に張りて種々の魚を集むる網に例へられた。(馬太傳第十三章第四十四——四十八節)天國の理想は不善なる影響と不斷に接觸し、競争すると雖も、其の發生及び蔓延は可能である。斯くて又た人は神に對し天國の理想に對して忠節ならざる者多き社會に在つて這般の忠節を維持することが出来る。

(一九三三年五月稿了)

附記) 本稿は余が本誌第十七卷第一、二號に掲げたる「舊約全書に現れたる社會思想」

の續編として遍く原始基督教の社會問題に對する態度を窺はんとせるものであるが、今は暫くイエスの社會思想の根本義を闡明するに止めて筆を擱く。尙ほ本篇の讀者にして「改造」第五卷第五號所載拙稿「モーセよりキリストへ」を參讀せらるゝならば余に取つて非常なる幸福である。